（第３種郵便物認可）

重度障害者 自立に理解を

岐阜 映画上映し呼びかけ

自らの体験を話す海老原さん（左）

人工呼吸器を使いながら、地域で自立生活をする重度障害者のドキュメンタリー映画「風は生きよという」が6日、岐阜市橋本町のハートフルスクエアーGで上映された。映画製作の呼びかけ人の一人で自らも「脊髄性筋萎縮症」を患うNPO法人・自立生活センター東大和（東京）の理事長・海老原宏美さん(38)が「呼吸器を付けた障害者が地域で生きる上で、普通の人と同じような選択ができる社会になれば」と呼びかけた。（大井雅之）

上映会は、NPO法人障害者自立センター「つっかいぼう」（岐阜市）の呼びかけで開催され、約50人が参加した。映画は海老原さんを含め、人工呼吸器を使用しながら日常を生きる障害者の生活や周りで支える家族やヘルパーとのやりとりが描かれている。映画では「ゴー」という人工呼吸器が空気を送る音が繰り返し使われている。海老原さんは「呼吸器を使ったら人生が終わりなのではなく、呼吸器があるからこそ、元気に日常生活が送れているケースもあるということを知ってほしい」と話す。

上映後は、海老原さんが「当たり前の地域生活とは？」と題して講演。自らの体験談や思いを話し、「障害者も積極的に社会に出ていくことが大切」などと語った。

また、サッカーJ2・FC岐阜前社長で筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症している恩田聖敬（さとし）さん(37)も参加。「すごく共感する部分があった。私も障害があっても、普通なんだと思われるように生きたい」と感想を話した。